

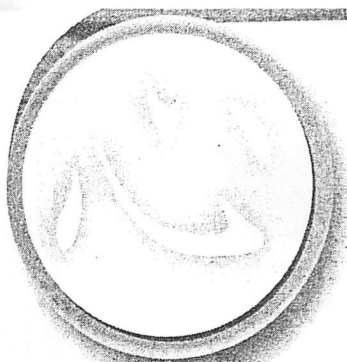
福島は今を気にかけて

サトウタツヤ

△震災の傷跡 今も 残っている△福島が 2年前で止まってる△

これらの川柳は、大学の講義で福島県浪江町の写真を見せた時に、学生が創作してくれたものです。

私は関係各位のご厚意を得て、今年6月末に浪江町を訪問しました。その時の写真で



す。もちろん震災直後からは変化があるのでしようが、素朴な印象としては「何も変わってない」と感じました。

崩れ落ちた屋根。水田に打ち上げられた漁船。高校の校舎には「入試については新聞を見てください」と書かれた

2011年3月15日(震災発生4日後)の貼り紙がそのま

ま。海岸沿いの小学校の体育館には卒業式準備の垂れ幕が

かかり、時計は2時51分で止まっていました(地震が起きたのは午後2時46分)。

人が住んでいないと生活の時間は一分も動かないんだ、と実感させるものでした。

東日本大震災から2年余りたちます。このごろニュースでもあまり報道しなくなったし、うまくいっているのだろ

う、とお考えの方も多いでしょう。その感想は間違っているわけではありません。復興の槌音は確かに新しい日本を作っています。被災者の多くも、前向きな姿を報道してほしいと願っています。そう、いくつかの例外を除いては。

例外の一つが、放射性物質



による汚染被害を受けた地域・人々です。福島第一原発の事故後、大量の放射性物質が南東の風に乗って浪江町などいくつかの市町村を襲い、足を踏み入れることさえ危険な状態が続きました。

こうした地域はその後、将来の見通しに依りて「避難指



福島県浪江町で(6月29日)

示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」の3種類に再編されています。このうち帰還困難区域は放射線量が大きく、12年3月から数えて少なくとも5年間は居住が困難だとされています。住み慣れた我が家・地域に、今後4年間あるいはそれ以上、帰れないのです。

多くの人は避難先で日常生活を営み、その意味で人生の時間は流れています。災害直後に生まれた子どもたちは満2歳を過ぎました。しかし、ふるさとに戻れば、時間は止まっています。

知らず知らずのうちに、心を失って忘れてしまうことを「心理的風化」と呼びます。風が石像を崩していくように、記憶すべきことが忘れ去られていくのです。

心理学者・エビングハウスが行った記憶に関する古典的実験によれば、懸命に覚えたことさえ、1か月後には21%しか保持されていません。

しかし覚えた直後なら忘却は少ないので、反復的に思い起こすと記憶は保たれます。一般に復習が大事とされるのは、この実験によります。

心理的風化に対抗する手段にも同じことが言えます。福島のことを日々思い起こしてほしい。それが難しければ、もし自分の身近に起きたらどうか、少しでも想像してみよう。そうした想像力は、将来の似たような出来事への予行演習にもなります。

私は立命館大学に来る前は福島大学の教員をしていました。何らかの体験と結びつけることによって、単なる知識ではなく「エピソード記憶」にする。これも、心理的風化を防ぐのに役立ちます。

読者のみなさん! ぜひ、現地に足を運んだり、足を運んだ人の話を聞いたり、避難生活を送る人に接したりして、被災地の今、福島の今を気にかけてください。

(立命館大学教授、心理学)